様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：奨励研究
研究期間：2020～2020
課題番号：２０Ｈ００７２７

研究課題名　　社会に魅せる研究力：研究成果の社会への貢献からみた新たな研究力指標の策定と可視化

研究代表者
井上　雄介（INOUE, Katsuyuki）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・IR推進室・特任専門職員

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　370,000円

研究成果の概要：論文や書籍（専門書）ではない社会に貢献する研究成果の指標を明らかにするため，リスト化すべき研究成果を整理し，論文，学術書，専門書などの形をとらないだけでなく，文字情報にすることすらできない多種多様な研究成果もあることを明らかにした。一方，研究成果の多様性のみならず，対象とする社会の範囲の違いから，相互比較がふさわしくないことが明らかとなった。
研究成果の多様性を社会に貢献する指標として提案したが，実際の研究者との合意を得られるような計算方法が課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，主に国立大学法人や大学共同利用機関法人をはじめとする研究機関の「社会」に対する貢献を測る指標を開発するものである。研究機関の中期計画・中期目標の策定およびそれらの評価（業務実績報告書など）に利用することを想定している。加えて，従前は，学術への貢献が中心であった研究機関の「研究力」に社会への貢献を取り入れようとするものである。

研究分野：研究評価・研究 IR

キーワード：研究評価指標　社会貢献の評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

本研究では，研究機関の社会に貢献する研究成果から測られる「社会に魅せる研究力」の指標を策定し，可視化する。

具体的には，(1) 社会課題解決や社会との協働が研究内容に含まれるプロジェクトの研究成果を調査し，それらの成果について，客観的で相互比較が可能な指標を策定し，それを「社会に魅せる研究力」の指標とする。図に示すように，研究成果の貢献先として,学術寄りと社会寄りとを考え，本研究では，主に社会寄りと考えられる研究成果を取り上げて研究力の指標の策定を目指す。そして，(2) 当該指標を用い，国立国語研究所およびいくつかの大学共同利用機関や国立大学について「社会に魅せる研究力」の可視化を試みることを目的とした。

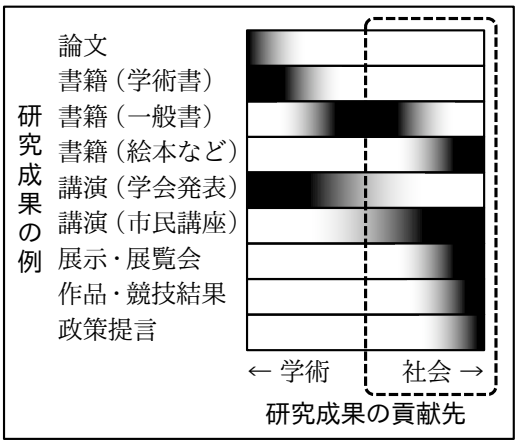

図: 研究成果の例と研究成果の貢献先のイメージ。
より色の濃い部分に研究成果がより貢献していると考えられることを示す。
本研究では，社会に貢献する研究成果（破線で囲まれた部分）の指標－社会に魅せる研究力－を策定し，その可視化を試みる。
なお，本図の研究成果の例は，あくまでも例示であり，指標策定の対象となる研究成果をこれらに限定するものではない。

２．研究成果

まず，論文や書籍（専門書）といった形をとらない社会寄りと考えられる研究成果の指標を探求するため，リスト化すべき研究成果を整理した。その結果として，例えば，消滅危機言語を記録し継承するための絵本の出版，方言劇を創作し，加えて，それを地域住民と共に上演する，持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development: ESD）に資するボードゲームの作成など，論文，学術書，専門書などの形をとらないだけでなく，文字情報にすることすらできない多種多様な研究成果もあることを明らかにした。その一方，このような研究成果は，多種多様であるだけでなく，各研究成果が対象とする社会の大きさも異なることから，当初の計画のとおり，相互比較することは，数値の上では可能であっても，その数値が研究者に受け入れられることはほぼなく,相互比較自体がふさわしくないという結論になった。

そこで，前述の，貢献先がより社会寄りである研究成果のリストに含まれる研究成果について，多様性指数（主にシャノン・ウィナー（Shannon-Weaver）の多様度指数）を計算し，これをより多くの社会に貢献した指標としてみなすことを提案したが，これについても，実際の研究者の感覚と異なる，すなわち，研究成果の多様性が高かった研究プロジェクトが低かったプロジェクトよりも社会に貢献しているとは限らないことも多々あった。原因は，各プロジェクトの目的が異なるからであって，プロジェクトの目的ごと，また，対象とする社会の大きさなどで正規化したのち，成果の多様性を計算する元となる研究成果の種別を工夫することで，正規化された多様性ではあるが,相互比較可能な客観的な指標の一つとして使えると考えられた。

今後は，多様性を一つの指標としてより深めたいと考えている。この際の問題点は，前述した (1) 正規化の方法に加え，(2) 研究成果の種別間の「距離」が考えられる。この「距離」は，Shannon-Weaver の多様性指数では，計算に用いられないが，Simpson の多様性や Stirling の多様性など，種間距離を用いるものでは必須の値である。これらの多様性指数と距離を適切に設定することで，より研究者の感覚に近い指標を作成する予定である。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 井上雄介
２．発表標題 国立国語研究所が提供する研究資源を用いた研究成果の学術分野の多様性
３．学会等名 2022 年度 国立国語研究所 IR シンポジウム「研究資源の提供を適切に評価する指標とは何か」
４．発表年 2023年

１．発表者名 井上雄介
２．発表標題 研究資源の提供を適切に評価する試み
３．学会等名 継続的改善のための IR/IE セミナー 2023
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名